



## 人間は、かぶれる

にんげん

野田 秀樹

のだ ひでき

近頃、海外の旅はヨーロッパ、アジアばかりで、とんとアメリカへ行くことがない。かれこれ十年はアメリカへ行っていない。劇団をやっていた頃のニューヨーク公演が最後になるのか、それさえ定かではない。アメリカの記憶が臃だ。おかげで、私はアメリカの呪縛から解かれた気がする。「トムとジェリー」を見て育ち、知らずBGMに流れているビッグバンドジャズを聞いて育った世代だ。アメリカにかぶれていないわけはない。

そのアメリカかぶれたるや、近頃の日本はとみにひどくなっていると思う。世界の情報は日々こんなにも発信されているのに、日本人が受け取る情報は実に限られている。アメリカが海外(=日本の外)そのものだと思っている。私にしても、ロンドンに暮らしてアメリカの情報を遮断されるまでは、日本の海外はほぼアメリカだった。だがどうやら、自分は思っていた以上にアメリカかぶれをしていることを知り、アメリカの独りよがりな鼻についてくるに連れて同時に、今度はヨーロッパやタイにかぶれている自分が分かってくる。

おそらく私がロンドンに住むことがなく、タイの役者達と芝居を作ることがなければ、そうはならなかっただろう。人はそういうものだ。自分の暮らしたとこ

ろ、接した文化にだけかぶれるものだ。ロンドンで会った白タクの運転ちゃんが言っていた。彼は、アフリカで生まれすぐにイギリスへやってきた。だから「すこしも、アフリカに帰りたいなんて思わない。懐かしくもない。だって、知らないんだから。お客さん、アフリカに帰りたいなんて思わないだろう?」だって、アフリカを知らないから」

人間は、自分が何かにかぶれているに過ぎないのだと気がつきさえすれば、他の文化や宗教や思想を余裕を持って見ることが出来るようになる。偏狭な心で、かぶれたままの人間のコトバは、もっともらしく聞こえるが胡散臭い。昔の旅人の旅行記など殆どそうだ。当てになつたもんじゃない。僅かな時間滞在し、そこで偶々見聞きし食ったり呑んだりしたもので、その文化の全てを語ってしまうのだから。つまり、短期間集中かぶれ講座のようなものだ。そんなもので、そのご当地の文化を語られてはたまったものではない。今でもいるではないか、たった十日か一月、或いは一年、どこかに滞在しただけで、その全てを知っているかのように語る輩が。感想を述べるのは良い。だが、判断するのは良くない。旅をすることで、人はその土地をよく理解できるなどとほざくが、本当は、旅によってその土地をまず誤解するのだ。なにせ人間は、すぐにかぶれてしまうのだから。

(劇作家、演出家、役者)

げきさつが えんしゅつが やくしゃ